

「真に人間的なるもの」 を問う

国家が、子どもたちのなかに、教室のなかに、「道徳なるもの」をいままですらに持ち込もうとしている。国家の道徳がこの国とアジア地域に住む人々の生活と人生に多くの悲劇をもたらし続けてきた歴史の事実に対してまともに反省や応答もせずに。きびしい生活に追われる生活保護受給者へ監視の眼差しを強化する動きに象徴されるように、この国では社会における他者への不信（人間観の貧困）が進行している。いまこの社会は、「真に人間的なるもの」が問われている。人間的なるものへの回路は、国家の道徳によって私たちを導くのであろうか？

本特集では、国家による道徳ではなく、真に人間的なるモラルを考えてみた。社会全体を豊かにしていくうえでの再分配問題、国家の道徳を破る人間的モラル、倫理的想像力を凝らした他者への応答。また国家の道徳の歴史（修身という）を再度問うこと。ヘイト・クライム問題をとおして社会のあり方を問うこと。

他方で、目を凝らせば教室のなかに、教師の日々の教育実践のなかに真に人間的なるものへの営みがある。そのいくつかより、子どもが日々の生活のなかに抱えている課題をとおして、あるいは他者との出会いをとおして、確かなモラルを育む実践を見ていきたい。

いまこの社会で必要とされるモラル形成の課題は、「道徳の教科化」の文脈ではなく、日本の歴史や社会の課題と向きあえる主体の形成にあると私たちは考える。